
10センチの超能力者

シェイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10センチの超能力者

【Nコード】

N6955Y

【作者名】

シェイカー

【あらすじ】

主人公芦屋 礼はどこにでもいるような普通の学生。当然の如く近場の高校に入学したがその学校は超能力者収容学校という裏の顔を持ち、政府の保護の下覇権を争い4つの組織が戦闘を行っていた。芦屋も超能力者ではあるがその能力は「物を10センチ動かす」だけ。そんな彼は裏の世界で生きていく事が出来るのか！？

「平凡な日々が懐かしい…」

基本的には週一更新を目指して頑張ります。

入学式

俺が小さかった頃、両親は近所でも有名なオシドリ夫婦だったらしく俺が何かする度にきやつきや言ってたのを覚えている。

「ほら、積み木だぞ」

父さんが楽しそうに三角形の積み木を手にとる。

母さんはその時家事をしていたんだろう。2階にはいない。

俺は今積み木のお城を建築中だ。

「あー…うー」

もちろん3歳の子供がまともにしゃべれる訳もなく両手を上下することしかできない。

「ん？これじゃないのかな、じゃあこれか？」

父さんは三角形の積み木を置いて今度は立方体の積み木をとる。違う。それじゃない。俺が欲しいのはそれ

「なっ…！か、母さん！」

父さんが目を見開いて1階へ駆け出して行った。

俺が何をしたのか、それを母さんに伝えるために。

P r r r r P r r r r

「……………うん」

電話音に似た音を出す目覚まし時計は久々の仕事に張りきったのか、普段より大きく響いてるような気がする。

寝ぼけ眼をさすりながら俺は体を起こしケータイを覗く。

4月9日 月曜日 7:01

「はあ……………起きるか」

二度寝しない内に学校へ行くための身支度を始める。
窓を開けると桜の花びらが中に入ってきた。

まずはトースターに食パンを一枚放り込み3分焼き上げる。その間に歯磨き並びに洗面を済ませテレビをつけ、食パンを取り出しジャムとコーヒーを用意してテレビの前にある机に置く。

「今日は一日穏やかな天気が続くでしょう、か」

てんびん座の運勢はつと…8位か。若干悪いな。

まあそんなのほとんど気にしないけどな。うん、今日のラッキーアイテムはキシリトールガムか。

食パンを食べ終え、軽く口をゆすぎ自室にあったキシリトールガムを1個口に入れる。

寝室に飾ってある真新しい制服に着替え俺は家を出た。

7:50

外は天気予報のお姉さんが言っていたような穏やかな気候、青い空には白い雲がちりばめられ桜の花びらが地面を彩る。毎朝ご飯をもらいに來る黒猫に残しておいた食パンの耳をあげて、俺は左手にある赤い屋根の家の方向へ歩を進めた。

去年まで通ってた道とは反対方向へ曲がり俺は新しい学校へと歩く事に違和感と不安を覚えたが学校に近づくと俺と同じく真新しい制服を着た生徒達が流れを作っている。

とりあえず道は間違えてないようだ。

俺のようにテンションの低いヤツはほとんどいない、聞こえてくる話は「クラスどこかな」とかそんなありふれたものばかりだ。

5

またヒマで代わり映えしない毎日が始まるのか。

はたまた俺の人生観を変えてくれるような出会いが待っているのか。後者であることを祈ると同時に何も起こるまいという否定的感情が浮かぶ。

我ながら冷めた性格だ。

俺はひとつ溜息をつき学校の門をくぐった。

今日は俺がこれから3年間通う陽光学園高校の始業式だ。

この付近には春央 立夏 秋栄 冬明と春夏秋冬の文字が含まれた
中学が4つ存在する。この陽光学院にはその4つの中学から上がっ
てくる生徒が大半で、どこに所属していたか という話は他人と仲
を深めるためには便利な話のタネとなる。全体的にまとまった春央
スポーツに力を入れる立夏 勉学にいそしむ秋栄 文化系の部活
が豊富な冬明という話はこころ近辺では常識に近い。

ちなみに俺は家から一番近いという理由で秋栄に通っていた。

校庭には沢山の花びら、楽しそうな声がそれを際立たせていて、ク
ラス分けの張り紙がされている柱に新1年生がワイワイとたかっ
ている。

そんなところに入っていくのもめんどくさいんだが行かなければク
ラスは分からない。

人ごみをかき分け俺の名前を張り紙から探す。

1 - E 1番 芦屋 礼

あ から始まるから大体上の方に書いてあるのは助かる。
教室の場所を確認して俺は校舎の中に入っていった。

教室に入ると来る時間がまだ早すぎたのか余り人数が多くない。
目立たないように一番スミの席を選び腰を下ろす。

「よ！お前もウチのクラスか？」

話しかけられ振り向くと身長175センチくらいの男子がにこやかに笑っている。

高1の始めで175センチは結構でかい。

ここにいるんだから当たり前だろ、と言ってやりたいもんだがクラスのヤツにわざわざ悪いイメージを与える必要もないか。

「ああ、秋栄出身、芦屋 礼だ^{らい}」

「俺は徳井 亮太だ、よろしくな。ところで秋栄ってことは頭いいのか？」

「ああ、まあな、金銭面的に私立にはいかなかったけど」

「どれくらいよ？」

「70くらいかな、こないだは少し良くて72だったハズだ」

もちろん偏差値の話である。

家ですること無く友達と遊ぶ金銭的余裕もないため仕方なしに勉強していたらここまで上がってしまった。認めよう、俺はぼっちだ。

俺の成績を聞いて徳井がいいヤツを見つけた的な顔をした。

「マジか！今度ちよくちよく勉強について質問したりするかもしれないからよろしくな！」

「……徳井はガタイ良いけど何かスポーツしてるのか？」

「ああ、バスケットをやってるんだ。立夏中の主将だったんだぜ」

そついつて胸を張る徳井。立夏の主将とはかなりの実力者だな。

たしか立夏のバスケット部は結構強かったハズだ。興味ないからよく分からんけど。

そんな感じで徳井が中学時代の話が続いていると教室の前のドアが開いた。

「よし、お前ら席につけ。体育館の準備が遅れているらしいので、余った時間に自己紹介をしてもらおうと思う」

そう言っ入ってきたのはウチの担任だろうか？時計の針を見るともう8時半になっている。

「よし、じゃあ出席番号順に名前を呼ぶから名前と何か趣味でもなんでもいいから言っていってくれ。芦屋」

また俺からか。出席番号1番ってのはいいことばかりではない。

俺は立ち上がり淡々とした口調で

「秋栄中出身芦屋 礼。特技でもないけど勉強は結構できます」とだけ言っって着席。

こんなところで目立つのもバカらしいし印象に残らないくらいが丁度いいだろう。

その後2番3番と順に進んでいき空席があるのに気づく。

「出席番号15番の辻…はお休みか？じゃあ次16番の徳井頼む」

始業式から休むとは匂いがするな…ぼっちの匂いが。

最初に済ませた俺にとって2番以降はほぼヒマな時間でもある。すきま風に乗っって花びらが俺の机にやってきた。

俺はそつと窓を閉めた。誰にも気づかれることもなく。

自己紹介が終わった後は体育館へと移動。もちろんこのクラス最初の団体行動である。

体育館につくとすでにたくさんのクラスが自分達の席に座り始業式の始まりを待っている。

俺達Eクラスの席は左側の真ん中あたりだった。

別に並びとかはどうでもいいように俺の隣にはなぜか徳井が座っていた。

「おつす、さつき俺すげーもん見ちまったぜ」

小声で話す徳井に俺も小声でかえす。

「何を見たんだよ」

聞かなくても予想はできている。

そして徳井の言ったことは俺の予想した通りのものだった。

「お前の横の窓がさ、『勝手に』閉まったんだよ。誰に触られてる訳でもなく」

俺は一つため息を心の中でつき、そんなわけないだろ、とだけ言い返した。

『えー、では始業式を始めます』

始まったようだ。校長が壇上に上がりマイクを握っている。

「なあ…」

「なんだ？」

「なんで校長先生仮面してんだ？」

「知るかよ。本人に聞いてこい」

あれは何の仮面なんだろうか。右目の部分だけ無いのも気になるし。

世の中には謎がたくさん、ということか。

ざわざわ…

『静かに、この仮面が気になる人もいます。が』
ふんふん。何か理由がありそうだ。

『これを付けてないと緊張してしまうので付けてるだけです。気にしないでください』

期待した俺がバカだったよ。

体育館の中にさらに不穏な空気が流れ出す。

当の本人は何でざわついてるか分かってないようだ。あんな説明で納得させられると思ってたのか校長。

『えー気を取り直して、まずは各クラスの担任を発表します』

どうやら3年かららしく俺達1年は自分達の番を椅子に座り待つ。

『Eクラス担任、山本達次』

名前を呼ばれ立ち上がった人は体育教師なのか体つきがいい二十歳半ばの教師。

あれがどうやらウチの担任らしい。今朝来た先生とは違う。(後で知った話によると今朝来たのは副担任だった)

山本と呼ばれたその教師は俺達の座ってる場所を一瞥し小さく会釈した。

体育館での退屈な校長先生の話が終わり（座らしてくれるだけマシだったけど）教室に戻ってきた俺たち。

すでに他のクラスから生徒が出てきて廊下を歩いている。

ウチのクラスはまだ担任が来ていないため終礼が始まらないため、文句を言うヤツもいたが何人かで固まってワイワイやってるヤツのほうが多い。

こうやってグループってのはできていくんだな。興味ないけどさ。

そして残念なことに本人の意志に関係なく、勉強ができるという武器を持つてる俺も徳井のグループに取り込まれてしまった。

「にしてもウチの担任イケメンすぎねー？」

「だよなあ、なんでも体育の時とか女子がきゃっきゃ言っらしいぜ」

「マジかよ、ナルシストすぎんだろ」

「なあ、お前はどう思う芦屋」

む、話を聞いてなかった。とりあえず無難に答えておこう。

「俺もそう思う」

「だよなー」

よし、回避成功。

内心安堵していると話が次に移り、今度こそ聞き逃さないよう気をつける。

「そっぴゃこないださ面白い話聞いたぜ」

「どんな？」

「なんとこの近くには幽霊屋敷があるらしい」

「幽霊屋敷？そんなのホントにあるならもつとウワサになってもいいと思うんだが」

「ところがどっこい、前住んでた人が出て行ってまだ1か月たつてないんだ。しかもそのたつた1か月で庭の草木が生い茂る幽霊屋敷に大変身したらしい」

へえ〜という声がみんなから漏れ俺以外全員のテンションが少し上がり、話が進む。

周りのヤツら何人かが振り向いたがすぐに自分達の会話の輪に戻ったようだ。

「んで、その幽霊屋敷はどんな人が住んでたんだ？」

「これも噂なんだが住んでいたのは画家らしい。んで屋敷の中にはその人の書いた絵が未だに飾られてるらしいぜ。しかも気持ち悪い絵ばっからしい」

「なーる。それは怖いけど面白いな」

「じゃあよー！」

徳井が手をたたき、俺達は徳井に注目した。他のヤツらも見てるけど徳井は気にせず話を切り出した。

「俺達の親睦を深める目的で、行ってみねーか？」

「行ってくつて幽霊屋敷に？」

「おうよ、夜に全員で集まってその幽霊屋敷とやらに繰り出そうぜ」

「「おおー」」

「もちろん芦屋、いやライも行くよな！」

「な、なんでそうなるんだよ」

「当たり前だろ、こういうのは全員で行ってこそ！ちゃんと迎えに行つてやるからさ！」

そういつて笑う徳井を一瞥し溜め息混じりにこう思う。

所詮8位は8位か、と。

幼なじみ

俺達が今生きているのは西暦2080年。あと20年程で某猫型ロボットの生まれた世紀へと移行する訳だが、今の所超ハイテクな日々が身近に訪れる気配はない。

代わりに俺達に訪れた世界は『超能力者の居る世界』だった。

アニメやマンガの世界でしか起こり得ないと思われていた事を彼らはその力をもって起こして見せ、過去にどうやって作られたのか分からなかった地上絵やミステリーサークルはその殆どが宇宙人ではなく超能力者によるものだということが最近の研究で分かっている。しかし今現在超能力者の絶対値が少ないこともあって超能力者は世間あまり歓迎されていない。

どんなに些細な能力であつたとしても。

いわく『超能力者は人類の敵になりうる』だとか、あまつさえ『超能力者は人間とは別の生物だ』とまで言う人が居るほどののだ。

たとえ超能力者であってもそれを他人に公表しているヤツなんて政府直属の超能力軍に所属しているヤツらだけだろう。(もちろんその軍自体の存在も危ぶまれている訳だが)

さて、話は変わるがあの後すぐに担任の山本が教室にやってきて速やかに終礼が行われた。

遅れてきたこともあって山本は簡単な自己紹介に配布物を済ませただけだったがクラス的女子生徒達はすでに色めき立ち、男子生徒達は対象的にイライラを募らせた。

そんなテンプレのような入学式も終わり(若干イレギュラーもあつ

たが)俺は徳井以下計4人で下校していた。

話題は最初、幽霊屋敷についての話がその大半を占めていたものの、時間が経つにつれ健康的な男子高校生らしい会話へと移っていった。今回の議題はクラス的女子生徒のランクラしく、福原さんは小柄で可愛いとか三森さんは胸がでかかったとか女子には絶対聞かれたくない議論が続く。

「じゃあ1位は総合力の井上さんか？」

「いややっぱり福原さんだろ。人形みたいでめちゃくちゃ可愛いぜ？」

「黙れロリコン。女性と言えばやっぱり出るとこは出てしまるとこはしまる。これが大事だ。つまり三森さんこそ至高！」

「お前だつて結局外見じゃねーかよ。なあライ」

「……お前らな、そういう話を公共の場でするのは止めるよ。どこで誰が見てるか分からないんだからさ」

「そんなこと言ってライも会話に入りたくせに」

「ライはこう見えてむっつりスケベだと見た！さあ白状しな。どんな子がタイプだ？三森さんか？三森さんなのか？そうと見え！」

「お前の意見は聞いてねえよ！ほらライ、さつさとカミングアウトカモンカモン」

はあ……とんでもないグループに入ってしまった。俺は仕方なく3人に思いついたことを答える。

「俺としては特にこれといった好みは無いけど、強いて言えばこう……ミステリアスな感じの子が好みかな？」

一同がおーっと声を揃えニヤニヤしだす。だから嫌なんだこういうの。

「なるほどなるほど。どっかの見た目バカとは違う観点だな」

「バカだってよデブ専」

「お前に言ってるんだろーがロリコン」

「あんだと!」

「やんのか!」

「あーバカ、お前ら落ち着け」

2人がケンカを始めようとするところを徳井が止める。まあ原因はお前なんだけどな。と心の中で毒づいて苦笑いしながらその光景を眺める。

俺の好みについてだがホントにこれといったものはない。ただこの人はどんな人なんだろうと興味を持てる人がいいのだ。

つまりミステリアス。

そんな事をワイワイ話しながら歩いていると俺の家のすぐ近くへと着き、俺は3人に別れを告げた後に最後の質問をさせてもらった。

「ところでお前ら名前何だっけ？」

「「ひどっ!?!」」

デブ専が原田でロリコンが小山らしい。

家の鍵をカバンから取り出し玄関を開けようとした俺はポストに手紙が入っているのに気づいた。

差出人のところには何も書いていない。

中身を見てみるとやはり差出人の名は無く、ただ一言「くたばれ超能力者!」という文字が書いてあった。

名前が無くとも誰からの手紙かはよくわかる。今やどこにいるやら

俺の両親からである。

「はあ…またか」

ビリビリ手紙を破り玄関の鍵を開ける。

小説説明文に書いてある通り、俺は超能力者だ。能力はまあ残念ではあるが超能力者には変わりない。そして先程説明した通り超能力者は忌み嫌われる存在で両親は俺を小さい頃に里子に出してしまっただ。

里親は俺が超能力者であろうとなからうと分け隔て無く育ててくれた、俺の中では本当の親父と母さんだ。

そして親父と母さんは俺が中学生の時、仲良くガンで亡くなっちゃった。84歳と79歳だった。

ただ2人は保険に入っていたので俺が社会人になるまで十分持つお金が手元に残った。

そのため現在一人暮らし、毎日家事と勉強に追われる日々を過ごしている。

2階の自室へあがり着替えを済ませた俺はキッチンにある冷蔵庫を覗いたが、残念な事に食材が底をついていた。

カップラーメンも有るには有るんだが普段から栄養には気をつけているのでほぼ非常食扱いである。

「ん〜、まあ丁度いいかな。晩御飯の材料も一緒に買いに行こう」

俺はささっと制服から着替え、ポケットに財布を突っ込む。桜の花びらがむなしく地面を彩る中空はきれいな青色を描いていた。

家からスーパーへは学校と真逆の方向に歩いて10分ほどだが健康の事も考え自転車は使わないようにしている。じじ臭い発想だと自分でも思うがそういう性分だ。仕方ない。時刻はまだ11時を回ったところ。12時半には昼御飯が出来上がる計算。

「ライちゃん！居るー？」

俺が家を出てまもなくそんな声が家の方から聞こえてきた。

こんな真つ昼間に大声で人を恥ずかしい呼び名で呼ぶヤツなんて1人しかない。

俺は曲がり角から家を覗く。

……よし気づいてないな。

「あー！ライちゃんみつけ！」

「げ……」

なぜそこから俺が見えるんだゆず袖。

嬉しそうに走ってくる袖を見ているとまるでかくれんぼでもしているような錯覚を覚える。

「まったくもーなんで私を置いていくかな？」

「じゃあ逆になんで待たなきゃいけないんだよ」

「幼なじみだから！……って置いてかないでよー」

バカな事言ってる袖を無視して歩き始めると袖が回り込んできた。とせねえな」とどっかの悪役みたいな言葉をはく。

「ライちゃんはスーパーに行くのかな？かな？」

「…まあ、そうだな」

「じゃあついでに私の分もヨロシクウ！」

「じゃあ食費払え」

「ああ…そんな。しがない高校一年生のわたくしめにそんな大金を…うつつ」

「…いや150円あればいいんだが」

袖も食べるなら今日のチラシに書いてあった焼きうどん（2人前298円）を買おうしよう。

確か野菜はまだ冷蔵庫にあったはずだし。（え？冷蔵庫には何もなかったんじゃないかって？だって野菜室には何もなかったって書いてないからな）

俺としてはかなり良心的な措置なんだが袖はその場に崩れ落ちる。

「ああっ…私の少ないおこづかいを…そんな…」

注、月5000円もらってます。

「そんなに私から大金がほしいなら私を好きにしなさい！チラッ」

注、全然色っぽくありません。

「もーしょうがない！はい150円！」

注、どう見ても6円しかありません。

「なんで6円しか無いんだ？」

「いやー1円玉と5円玉に何もなしで150えん」

「…もういい。さっさと行くぞ」

「え？お金は？」

「お金より時間が勿体無い。今回はおごってやる」

「やつふー！流石ライちゃん分かってるね」

このこの〜と肘で突っついてくる柚は無視して歩き続ける。

柏崎柚香^{かしわざきゆうずか}は俺の家から隣に三軒右に住む同い年。お隣では無いので某双子の野球マンガ的關係ではなく、ただよく遊んでたっただけの關係だ。

ただ小さい頃の俺は親に捨てられたら事でかなり暗い性格をしていたが柚のおかげで少しずつ明るくなった。

その件では感謝しているが、ご近所付き合いも早十数年。

俺は今や柚の料理人とはほぼ同義である。こういう午前中授業の時はいつもこうで時々柚の母まで相伴預かることも。

俺はしつこくつきまとう柚を軽くあしらったりしながらふと思う。

俺がミステリアスな子を好むようになったのはコイツのせいかもしれない、と。

こうしてスーパーに着いた俺と柚は買い物カゴを一つ手にとり中に

入る。

俺が晩御飯の献立を考えつつ店内を回っていると袖が何かを持って来た。

ドサツ（ポテチ×5）

ガサガサ（俺がポテチを戻す音）

ペシンツ（袖が俺の頭を叩く音）

「何すんだよ！（すんのよ！）」「」

「ためえ昼御飯どころかおやつまで俺に払わせる気か！」

「何よ！ライちゃんおごつてくれるって言うってたじゃない！」

「昼御飯はな！おやつくらい自分で買え！そして太れ！」

「なっ！乙女に絶対言ってはいけない事をよくも！」

「誰が乙女やねん！」

「何で関西弁！？訳が分からないよ！」

ぜえぜえはあはあ言いながらお互いにらみ合う。相変わらずふてぶてしくて遠慮を知らないヤツだ。俺達のケンカを見て人だかりが出来てるんじゃないか？と思った人は甘い。全部音量は抑えてある。そこまですぐ俺達はバカじゃない。

「とりあえず。おやつは自分で買え、もし俺の買い物カゴにおやつが入ってたら昼御飯は作らないからな」

「むー…」

しびしびといった感じで袖がポテチを直しに行く。

あいつは何かやらないと気が済まないのか？

気を取り直して食材選びに戻ると袖が帰ってきて一言。

「私はカレーがいいと思うよ！」

… 晩も食べるつもりだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955y/>

10センチの超能力者

2011年11月22日02時53分発行